アフリカ地域研究の手法

1．研究組織

研究代表者：田中　二郎（京都大学アフリカ地域研究センター・教授）
研究分担者：高村　泰雄（京都大学アフリカ地域研究センター・教授）
太田　　至（京都大学アフリカ地域研究センター・助教授）
松田　素二（京都大学文学部・助教授）

2．研究のねらい・目的

本研究は従来、個々の地域や民族集団ごとに分析されてきた知見を総合し、熱帯アフリカの全域を網羅することによって、各地域社会に通底するアフリカ的特性を抽出しつつ、「日常生活のなかの人びとの徹底的にローカルな視点」と「生態学の方法論」をもちいることにより、自然と対話し、それとの巧みな共生を達成してきた人びとの長年にわたる叡知を、多面的に解明するための新たなる研究手法を確立することをめざすものである。また、アフリカに限らず現代の第三世界は、南北問題や地域開発に象徴されるような矛盾をかかえている。こうした「地域」に対して、地域研究者はどのような立場をとりうるのかを検討することにより、ほかの地域の研究者とも共同で議論できるような視点を模索することも、本研究の目的である。

3．平成６年度の研究経過

今年度は下記の２回の研究会を開催した。

1） 第１回研究会

開 催 日：1995年７月16日
開催場所：京都大学アフリカ地域研究センター・セミナー室
報 告 者：松田素二（京都大学文学部）
テ ー マ：地域研究の倫理性再考―東アフリカ社会の場合

報告の内容は、以下の通りである。

アフリカ地域研究は、今大きな曲がり角をむかえている。これまでアフリカ研究の中心は、ヌエル、タレンシといった「孤立した未開社会の部族研究(tribal studies)」であった。しかし今日、そうした社会を「発見」することは不可能である。世界的規模の社会システムはその周縁部としてアフリカをすっぽり覆っているからである。「アフリカの地域研究」を「研究者」がこれまでやってきたこと、そしてこれからやろうとしていることは、このコン

テクストの中で、今日、きびしく吟味されるようになっている。

アフリカに限らず、地域研究は基本的に権力作用としての側面をつねにもってきた。とりわけアフリカの場合は、16世紀以降の奴隷交易、19世紀の帝国主義と植民地主義、20世紀の冷戦構造を通して、ヨーロッパとの関係において、一方的な被支配社会でありつづけた歴史がある。地域研究は、実はこうした国際政治支配の力学の中でつくりだされ成長してきた。

さらにこの直接的権力作用の深層には、他者をつくりだし、認識を支配しようとする言説の権力作用も働いている。それゆえにアフリカ研究は、現実生活における政治力学のレベルとそれを表現する領域における言説力学のレベルとの双方における権力作用、イデオロギー作用としての側面をもってきたのである。

では、こうした規定の中で、アフリカ研究者のとるべき選択はどのようなものであろうか。それには三つあると考えられる。一つは、大半の研究者が結果的に選択する「中立主義」の立場である。ウェーバー的な価値自由は、アフリカのフィールドワークにおいては今だに生き残っている。第二の道は、特定の現場の社会実践に深くコミットするいわゆる「コミット主義」の立場である。しかしながら、開発援助に積極的にコミットすることで、アフリカへの権力作用を無化しようとする試みは、逆に認識の権力作用を強化することにもつながりかねない。

第三の道は、地域研究に思いきった「ミクロ主義」と「マクロ主義」を同時にもちこむことである。「ミクロ主義」とは人間と人間が瞬間的あるいは継続的につくり出す場面に注目して、そこにあらわれる身ぶりや会話などの相互作用を対象化するアプローチを指す。これによってうさんくさい「○○の社会は・・・」とか「○○の民族は・・・」という認識論的欺瞞から抜け出すことができる。また一人の人間が有する創造力や主体性に目をむけることによって「人間とは何か」という社会認識の基本が射程に入ってくる。これに対して「マクロ主義」とは、たとえば人類史を対象化するといった研究方法を指す。「ミクロ」と「マクロ」という、一見したところでは地域研究に無縁な領域から、逆に地域を結像させていくことが重要になるのである。

2） 第2回研究会（シンポジウム）

開 催 日：1995年2月21日

開催場所：京大会館101号室

テ ー マ：「少数民族ブッシュマンの現在―その歴史性とアイデンティティ」

本研究会は公開シンポジウムの形式をとって実施し、以下の6名のおこなった問題提起に対

して、4名のコメンテータにそれぞれを批判してもらい、そのあと参加者全員をふくめた質疑応答と討論をおこなった。参加人数は約60名であった。

報告者と演題およびコメンテータは以下の通りである。

---

①大崎雅一（兵庫県立人と自然の博物館）「語り継がれる歴史の復元」
②今村　薫（京都大学アフリカ地域研究センター）「身体に刻まれた生活史—グウィの初潮儀礼」
③池谷和信（北海道大学文学部）「生活と社会の変容—乾燥農耕の技術と農業経営」
④中川　裕（東京外国語大学外国語学部）「コイサン諸語におけるグウィ語・ガナ語」
⑤菅原和孝（京都大学総合人間学部）「日常会話にみる共同性と対等性」
⑥北村光二（弘前大学人文学部）「ブッシュマンは平等主義者か」

---

①～③のコメンテータ：渡辺公三（立命館大学文学部）
寺嶋秀明（神戸学院大学人文学部）
④～⑥のコメンテータ：西田正規（筑波大学歴史・人類学）
嶋田義仁（静岡大学人文学部）

大崎の報告は、近年、熱い議論をまきおこしている「伝統主義者（traditionalist）」と「修正主義者（revisionist）」との論争に関連するものである。この論争をかんたんに要約すると、一部の研究者が、現在の狩猟採集社会に関する生態学的な研究に立脚しながら、人類史のなかでの狩猟採集経済を復元しようと試みたのに対して（伝統主義者）、それは対象とする社会を閉鎖的なものとみなし、かつ歴史的変遷の可能性を無視しているという批判がなされている（修正主義者）のである。

大崎は、自分自身が収集したブッシュマンの昔話を中心にして、その1920年代以降の歴史を再構成するこころみをおこなった。彼は、サバクトビバッタの来襲や天然痘の流行といった文書記録にあらわれ、かつ人びとが鮮明に記憶している年代を手がかりにして、当時の生業や周辺民族との交易の実態を調査した。そして、こうした研究をとおして大崎は、従来のブッシュマン像、すなわち「外部社会とはほとんどかかわることなく、ブッシュマン独自の伝統的生活様式である狩猟採集によって長年にわたって自給自足的な生活を送ってきた」という認識は、もはや修正せざるを得ないことを指摘した。そしてまた、ブッシュマンの近隣に居住していたバントゥー系の農耕民との関係については、これまでに一部の研究者のあいだで、歴史的にはブッシュマンが農耕民に従属する関係にあったと主張されているのだが、

少なくともセントラル・カラハリのブッシュマンでは、そのような関係であったとは考えられないことを指摘した。

今村の報告は、ブッシュマンの初潮儀礼に焦点をあてることをとおして、個人の生活史の一側面を解明しようとするものである。すなわち、この儀礼は女性にとっては重要な儀礼であり、人びとの記憶に鮮明に残っている。多くの女性に自分の初潮儀礼のときにどんなことがおこったのかを、儀礼自体に参加した人びととその社会関係などをふくめて聞き込むことにより、ブッシュマンの暮らしの実態の変化を明らかにすることが、今村の研究目的だった。そして、現在50歳以上の年齢に達している女性とそれ以下の女性を比較すると、前者では初潮時に「いいなずけ」がいた比率が有意に高いことや、儀礼のなかで初潮をむかえた女性がかぶる帽子は象徴的に重要な意味をもつのだが、その帽子を製作して彼女に与えるのは、50歳以上の女性ではオジや夫の父、夫自身が多いのに対して、50歳以下では父や兄が多く、自分自身でそれを製作する女性も出現していることを明らかにした。

池谷の報告は、従来は「狩猟採集民」としてのみ注目されがちだったブッシュマンの農耕に焦点をあてたものである。彼らは、トウモロコシやスイカをはじめとして数種類の作物の耕作をおこなっている。池谷は、その栽培技術体系、土地利用の方式、労働力の調達方法などに注目しつつ、カデ地域のブッシュマンが農耕をとりいれてきた歴史を、社会経済史的な観点から論じた。

以上の３つの報告に対してコメンテータの渡辺は、ブッシュマンの歴史を考える際には、植民行政との関連に注目しなければならないこと、しかしその際には、一方的に統治される受動的な立場にいるという視点ではなく、能動的に状況に対処してゆくという側面を重視しなければならないだろうと指摘した。彼はまた、研究者がブッシュマンには「歴史がある」と言明するとしても、それは「歴史がない」と言明することの反転であり、どちらもおなじ地平にいること、すなわち外部から研究者が対象を客観視して把握しようとする姿勢をとるという意味では変わらないことも指摘し、ブッシュマン自身の歴史観を抽出する努力をしなければならないと強調した。

コメンテータの寺嶋もまた、研究者の歴史観が直線的な時間の流れを暗黙のうちに前提としているのに対して、ブッシュマンの歴史観は、それとは異なっている可能性があることを指摘しつつ、彼らの民俗認識にもとづいた歴史をえがく必要があるとコメントした。

中川は言語音韻論の立場から、ブッシュマンの一部の集団であるグウィとガナについての言語学的な調査の結果を報告した。コイサン語と総称される言語には、北部、中部、南部の

三つの語族がふくまれており、グウィとガナは中部コイサン語族に属している。コイサン語は一般にクリック音をもつことで知られているが、中川の調査によるとグウィ語とガナ語では流入音と伴奏音の結合によって、合計52のクリック音が存在することが判明した。従来、中部コイサン語はクリック音が少ないといわれており、コイサン語としては歴史が新しいと考えられていたのだが、中川の発見により、中部コイサン語族の歴史を再考する必要があることがわかった。このような視点から、今後、周辺の別の語族を研究することにより、コイサン語を話す人々の歴史を言語を手がかりにして再構成できる可能性がある。

菅原は、ブッシュマンの会話の分析をとおして、「平等主義」をコミュニケーションの視点から分析した。ブッシュマンの平等主義は従来、所有物や食物を平等に分配するという物質的な側面とそれを可能にしている価値観との側面から論じられてきたのだが、菅原はそれを、会話という対面的な相互行為の場面から論じている。彼はブッシュマンの平等主義を考えるうえで、「共同性」と「対等性」というふたつの概念を提唱した。「共同性」とは、日常の発話の場でくりかえして表明されている価値観であり、それは、複数の性・年齢クラスの内部またはその相互間における社会・経済・権力関係の特有の配置にむけて、各個人が注意の焦点を合わせるようにうながすインタラクションのパターンやプログラムである。これに対して「対等性」とは、個々のインタラクションを導く特有のセンスであり、一回ごとのインタラクションの局所的な状況に応じて、互いのかかわりに対する注意の焦点を自在に絞り込んだり拡散したりする能力を指す。

北村は、人間の平等性の起源を考察するさいに、従来の研究が、西欧近代的な思考のパラダイムを脱却していないことを指摘した。すなわちそのパラダイムとは、まず最初に自由に意志決定をおこなう個人の確立を暗黙の前提条件とし、その否定のうえに平等性を位置づけるという考え方に従っているものである。これは、「人間がものを所有し、かつそれを分配するようになると、受け取った側には負い目が発生することは必然である」とか、あるいは、「人間とは威信を求めるものである」といった言説にあらわれている。これに対して北村は、人間の平等性は、個体の自律性と主体性が確立されてゆく過程と、社会構造が複雑化することとが同時に起こる場で把握すべき問題であるととらえ、人間が個体性を確立してゆくことと社会が自律性を獲得すること（すなわち制度の発生）とを、セットとして考察する必要があると主張した。そして北村は、①優劣関係、②所有と分配のふたつの側面に注目し、優劣関係が否定されることにより、社会的共同が拡大して個体の主体化がおこる過程と、「霊長類的」なものの所有が否定されることにより、制度的操作と個体の自発的な共同性指向がお

こる過程とについての推論を展開した。

以上の三つの報告に対してコメンテータの西田は、人間の生活実感として「平等」であることがいかにいきいきとした現実を生きるうえで大切かという点を強調して、平等性の進化の考察が重要であると指摘した。コメンテータの嶋田は、ブッシュマンなど狩猟採集経済を基盤とした社会だけが平等社会のように論じられている点をとりあげ、国家社会が不平等社会であるというのは、思いこみにすぎないと指摘した。

4．研究の成果とフロンティア

本研究班のメンバーは、アフリカ地域研究の専門家であり、東南アジアの研究者ではない。そこで本研究を通して考えてみたいと思ったことは、単にアフリカ地域研究の現状をレヴューするのではなく、他地域の地域研究の方法論と批判的にわたりあえるような枠組をつくることであった。

そのため近年、地域研究、とりわけアジア・アフリカ・ラテンアメリカ地域の研究に対してなされている一つの方法論的批判にこたえようと努めることにした。その批判とは、サイードが『オリエンタリズム』などをとおして投げかけたような「地域研究における言説の問題」であり「ヨーロッパの認識支配の問題」であった。この認識支配の権力作用からのがれるために、地域研究の対象を思いきって場面行動までミクロ化し、他方では人類進化などの焦点にまでマクロ化する方法論を提唱した。

こうした方法論を討議して深化するためにはシンポジウムをひらき、そこで南部アフリカのブッシュマン社会をとり出して、ミクロ化とマクロ化のアプローチを吟味した。

まだまだ充分な枠組とはなりえていないが、チャレンジングなアプローチとして高い評価をえたと考えたい。

5．今後の課題

本重点領域研究によって発行されている季刊雑誌『総合的地域研究』の創刊準備号において伊谷純一郎は、「自制の哲学」の必要性を説いている。それは、長期にわたってアフリカの人びとと生活を共にすることをとおして、伊谷が人びとから学んだ哲学である。こうした洞察は、人びとと徹底的に「共にある」ことをとおしてこそ、得られるものであろう。そのような研究方法を、私たちがどのようにして方法論的に一般化し、言語化していけるのか——その模索の試みは端緒についたばかりであり、これからも意識的に継続してゆかねばならない。

6．研究業績

田中二郎

「狩猟採集生活における人間と植物」週刊朝日百科『植物の世界』24:14-50～14-55, 1994

高村泰雄

"Growth and dry matter production of sugar cane in warm temperate zone of Japan, 4. Effect of air temperature on young plant growth and photosynthetic rate at the active-tillering stage and the late growth stage. *Jap. J. of Trop. Agr.* 38(4):335-342 (with Hiroshi Ehara & Mikio Tsuchiya). 1994.

"Review of sisal procuction and research in Tanzania. *African Study Monographs* 14:227-240 (with Didias N. Kimaro & Balthazar M. Msanya). 1994.

「タンザニアにおけるサイザル生産の現状と問題点」『熱帯農業』39 (2), 1995.

太田　至

"Culture and Cognition. By K. Fukui," 1991. Tokyo, 1994 Review. University Press, Tokyo. *Nilo-Ethiopian Studies*, 1:85-86.

「ワンディバ教授とナイロビ大学アフリカ研究所」『ＪＡＮＥＳニュースレター』no. 4:6-8, 1994.

松田素二

「意味化の権力、範型化の抵抗―ケニア・オティエノ裁判のもう一つの構図」『法社会学』46:78-85, 1994.

「部族が近代国家に突きつけるもの」『別冊宝島東アフリカ読本』宝島社, pp. 174-180, 1994.

「人類学における個人、自己、人生」『現代文化人類学を学ぶ人のために』pp. 185-203, 1994.